

佐渡米通信

こめ〜る

2022年 5月号

発行日:2022年5月

編集人:佐渡農業協同組合 営農事業部販売企画課 駒形・渡辺(清)
jasadoeinoubu20@dune.ocn.ne.jp

健苗づくり・土づくり

春本番となり、育苗管理・本田準備といった米の品質を左右する大切な作業が忙しくなってきました。佐渡では農薬や化学合成肥料を佐渡地域慣行栽培基準比より5割以上減らした米づくりを推奨しているため、特に苗の良し悪しが重要ポイントとなります。

育苗段階からお米が出来上がるまでの化学肥料、化学農薬の使用量が制限されるため、1年間の計画を立て適切な栽培管理を行っています。



田んぼから水が漏れないように畦塗りをしている様子

令和4年度 佐渡米生産者大会開催 ～環境にやさしい米づくりと特A復活に向けて～

令和4年産米の作付けに向けて米生産者が課題を共有する「佐渡米生産者大会」が3月中旬に開催され、約150人が参加しました。

大会では「特A」復活に向けてJA十日町経営管理委員会の柄澤和久会長にリモート講演をしていただき、魚沼産コシヒカリが特Aから陥落した後の取り組みが紹介されました。JA佐渡では特A復活のカギとして、「土づくり」の強化を掲げています。本講演でも「土づくり」の重要性のお話があり取り組みの重要性を再確認しました。

JA佐渡では平成18年から「環境にやさしい佐渡米づくり」に取り組んでいます。ネオニコチノイド系薬剤を排除し、国の掲げるみどりの食料システム戦略が目指す持続性の高い農業に挑戦してきました。今年度はさらに脱マイクロプラスチックに向けた取り組みを進めます。



JA十日町経営管理委員会の柄澤和久会長によるリモート講演の様子

佐渡の米農家さんにインタビュー!!

昨年11月に開催された第1回「おいしい佐渡米コンテスト」で最優秀賞を受賞した風間俊一さん(74歳)にインタビューをさせて頂きました。

風間さんは、佐渡島の南部にあたる赤泊地域でお米を生産しています。小さい頃から親の姿を見て田んぼ仕事を手伝っていました。進学・就職を機に島外に出て、昭和60年にUターンで戻られたそうです。本格的にお米づくりを始めたのは14年前からで「最初は苗を植えれば当然出来ると思っていましたが、実際は全く出来ませんでした」と笑いながら当時のことを振り返られていました。

本コンテストの受賞については、「基本的に特別なことはしていない」とのお話でしたが、土壌MAPを参考にしたり、穂肥で倒伏しないようにするなど毎年試行錯誤しながら経験を重ねたとの事です。また、日々の細やかな生育管理はもちろん、自然の恩恵への感謝についても語られていました。



賞状と副賞を手にほほ笑む風間俊一さん

「トキを育むお米」がつなぐ佐渡の環境と文弥人形

バルシステム生活協同組合連合会主催の「トキを育むお米」がつなぐ佐渡の環境と文弥人形のオンライン交流会が開催されました。佐渡島内各地と中継で、棚田地域の米づくりやトキとの共生のお話、野浦地区「双葉座」による国の重要無形民俗文化財「文弥人形」の上演が行われました。

上演後には生産者への質問タイムが設けられました。暮らしの中でのトキの存在についての質問や、トキを通じた佐渡米を知ることが出来たなど、生きものと共生したお米づくりについて反響がありました。



交流会のフィナーレの様子



文弥人形上演の様子



赤泊地域

JA佐渡の公式 Facebook「佐渡のたんぼにつき」で佐渡の情報が見られます。
<https://www.facebook.com/jasadotanbo>

